

題として広く捉えている (p.5)。教育学研究は、ともすればその研究対象を学校あるいは狭義の教育に狭めがちであるが、中東・イスラーム地域における教育社会史研究を通し、改めて広い文脈で教育を捉えることの重要性を本書は示唆している。

第二に、19 世紀のイスラーム世界において中心的な地位にあったオスマン帝国の教育社会史、特に近代教育社会史の展開を、オスマン社会の歴史的な文脈のなかで緻密に考察している点である。冒頭でも述べたように、19 世紀から 20 世紀にかけてのオスマン帝国の動向を理解することは、他のイスラーム世界の動向を理解する上で必須である。筆者の専門にそくして言えば、東南アジアのイスラーム社会における教育の展開を考える上で、オスマン帝国の経験を活かすことはできない。蘭領東インドで 20 世紀初頭以降に出版された雑誌にはオスマン帝国、そしてその後のトルコ共和国に関する記事が数多くみられる。東南アジアのイスラーム社会にとって中東・イスラーム地域は常に重要な先進的地域であった。その意味で本書は、オスマン帝国を主な対象地域とする研究でありながら、他のイスラーム地域研究の深化に重要な貢献をしている。

第三に、本書によって設定された研究の射程の広がりや深さである。オスマン帝国とその近接地域のみならず、ロシア、ハブスブルグも対象地域とし、越境するネットワークによって歴史が連動し共鳴する様子が活写されている。本書を読み進めるなかで、生き生きとした歴史のダイナミズムを改めて実感した。本書には、比較史、関係史研究をさらに深化させるうえでヒントとなるような多くの示唆が含まれている。

以上のことから本書は、比較教育学分野、さらに教育史分野において先駆的な研究として位置づけられるものであり、歴史学研究者のみならず教育学研究者にとって必読の書である。オスマン帝国近代の教育史の専著が 90 年代以降に現れ、その後も教育というテーマが注目を集めている (p.8-9) ことは大変喜ばしく、一方で、教育学、教育史を専門とする研究者の責務について深く内省させられる一冊でもあった。

(服部 美奈 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授)

小杉泰『イスラームを読む——クルアーンと生きるムスリムたち』大修館書店 2016 年 242 頁

題名だけを見て、イスラームの入門書がまた一冊増えたか、と思ったのは評者だけではないだろう。だが本書の著者は、学界で常に新たな着想を実証的に提示してきた人物である。したがって本書の内容も、基礎知識を学び覚えるための従来のイスラームに関する解説書や、現地体験の感想とは明らかに異なる。現代のイスラームの諸相に関するエッセイを通して、イスラーム的な思考回路を積極的に読み解く概説書である。かつて大塚和夫氏が 2000 年に『イスラーム的』を発表し、「イスラーム的」な存在や思考について、特にイスラーム主義の解明を通して現代的な再定義を試みたが、本書の著者はその文庫本刊行にあたり解説を付し、現代のイスラーム復興とは、前近代が蘇ったのではなく、近代教育の申し子たちによる、きわめて現代的な極限状況である [小杉 2015: 337] と定義した。本書は、現代的な極限状況の仕組みを読み解きつつも、急進派などに象徴される狭義のイスラーム主義のみならず、イスラーム的な存在や思考に対するあらゆる視点についての新たな着想を、簡明かつユーモアたっぷりのエッセイで提示している点が特徴である。

著者に関してここで詳述する必要もなかろう。著者は 1983 年、八年間にわたるアズハル大学での留学生生活を経て、帰国後から現在まで精力的に著書や論文を次々と発表し、研究会や学会での活動を通してわが国のイスラーム研究を中心に担ってきた。「草の根イスラーム」、「イスラーム人生相談書」[小杉 1996]、「イスラーム復興」、「イスラーム中道派」、「思想の市場性」、「教経統合論」、「ミッラ録」など、イスラーム研究に関する理論化において、新たな用語を用いて数々試みてきた著者は、自身の研究領域について、イスラーム学、地域研究、比較政治学、国際政治学、比較文明学など多岐にわたっていることを自認している (p.233)。イスラーム法学や思想に関するテキストを丹念に読む文献学と、現代社会や政治の研究の両輪を融合させることによって、多面的、重層的にイスラームの諸側面を描こうとしてきた著者は、かつて『イスラームとは何か——その宗教・社会・文化』(講談社現代新書)を発表したが、本書はその続編、エッセイ編にな

ようにとの出版社からの依頼で書かれたものである。3部構成の本書のうち第1、2部は雑誌『言語』(大修館書店)に連載された文章がもととなっており、第3部は書き下ろしとなっている。

前掲書『イスラームとは何か』が、イスラームの成立や啓典と教義、ウンマ、ハディース、ウラマー、スーフィズム、宗派、イスラーム世界の広がり、そして現代世界と、総括的にイスラームに関する知識や思考回路を包括的に紹介したのに対し、本書では、ほぼ毎回、冒頭で著者の体験やムスリムの生活に関する話題が披瀝され、その話題からイスラーム的な思考回路が明らかにされる。唯一神アッラーへの絶対的帰依が、ムスリムの生活の隅々にいかに根ざしているか、そして非ムスリムにとって一見奇異に映る行動が、なぜ彼らの中で合理的なのか、クルアーンの章句や、著者のエジプトでの生活体験を中心に説明されている。各エッセイの冒頭にはアラビア語とカタカナで示されたクルアーンの章句等が示され、文字通り「読む」スタイルで統一されている。エッセイの冒頭でクルアーンが「読まれるもの」であることを紹介している(p.5)が、エッセイをアラビア語とともに紹介するのは、『言語』という雑誌の読者の関心に配慮したものと思われる。

本書の最大の特徴は、イスラームに関する発想の転換をいざなっている点である。すなわち、やわらかで軽妙な語り口が、発想の転換を強く迫ることはない。しかし読後には、「なるほど、こういう発想もあるのか」と得心できるようになっているのである。そして、この転換された発想こそが、イスラーム的な文脈、思考回路であることに気づかされるのである。「時間に合わせてきちんと働くことと、時間に合わせてきちんと礼拝することは、同じイスラーム精神の発露」(p.98)というマレーシア人の言葉は、宗教の戒律が窮屈だと感じる人間に発想の転換を促す。スンナ派とシーア派の違いについて、一般書であれば両派の成立に紙幅を割くが、著者は、スンナ派とシーア派の立場が固まってから、すでに千年以上が過ぎており、現代の両派の違いを起源で説明するのは、「いわば現代日本を大和朝廷から説明する」(p.44)ことに似るとし、時代で両派の関係も異なっていることを示唆する。利子を禁じるイスラーム銀行の発想については、一般に宗教のイメージという我欲を捨て、物欲を遠ざけるものであるが、イスラームは「欲望に対して非常に肯定的」(p.59)で「ムスリムとして儲けたい」(p.63)気持ちをイスラーム法が支えており、宗教が経済に介入すると考えるより、宗教と経済が入れ子状態の「教経統合論」で説明できるという(p.59)。夫婦間であれば性におおらかである(pp.117-118)など、ムスリムが教義で汲々としていると思っていると肩透かしを喰らう内容に溢れている。豚肉の禁止についても、クルアーンの食事規定を参照したうえで、著者自身の長年の観察の結果、信仰心を試すうえで、イスラームの場合は豚肉が禁じられたのではないかとの結論を述べている(pp.124-125)。あるいは、ザカートに関する解説では、「救済税」と訳すことの間違いを糺し、イスラームにおける「喜捨」である意味を説く(pp.183-184)。近年、イスラームに対する批判でしばしば取り上げられる「女性隔離」も、その語に男性の視線があると指摘、イスラームにおいては「男女分離」(pp.209-210)で、それぞれの社会が存在することを認めている点を解説する。西洋的な自由が「肌を見せる自由」であって、「肌を隠す自由」についてムスリム女性が認識するようになった経緯(p.209)は、まさにムスリム女性自身の「イスラーム覚醒」の事例であろう。本書の「千夜一夜物語」の部分は、碩学牧野信也の『アラブ的思考様式』の序文を思い出させる。『アラブ的思考様式』では、ダマスカスで大切な鞆を盗まれた著者が、親切なアラブ人に親切にしてもらうが、その返礼に現金を出そうとしてアラブ人を怒らせてしまった経験が紹介されている[牧野1979:6-13]。本書では、千夜一夜物語の中に見知らぬ旅人をもてなす話があることを紹介しつつ、イスラーム法学書に「客の権利は三日三晩」という記述があることから、客人歓待の仕組みを解き明かす(p.168)。

1980年代、わが国ではイスラームの都市性に関する共同研究が、イスラーム研究の大きな潮流となり、[ベシム1990]の翻訳や[羽田・三浦1991;板垣・後藤1992;三浦1997]のような成果が発表されたが、本書の「遊牧文化」では、イスラームの都市の発展は、西欧の都市の発展に見られるような都市そのものの肥大化ではなく、人々が定住する都市に出入りする遊牧民の存在によってこそ保障されている点が強調されている(p.174)。このことは、ムスリムが遊牧民の時代から、ネットワーク型の社会を温存してきたことがうかがえる。9.11事件発生後、アメリカとアル＝カーイダの対立について、国家と非国家の「非対称な戦争」という構図が議論されたが、ネットワーク型でウンマを志向してきたムスリム社会の特徴を理解すれば、「非対称」という発想そのものが西欧型の国家観に基づいていることに気づかされる。その一

方で、「イスラーム国」が「国 state」を掲げる点もまた、現代ムスリムの国家観を再検討する点で注視すべきであろう。

カイロの街角の掛け声から啓示の呼びかけへ、両親への敬愛が人類の祖アダムとイブへとつながる (pp. 130-131) といった、クルアーンに基づいたイスラーム的解釈が、著者ならではの分りやすい筆致で説明されている。各エッセイの始まりに出てくるエジプトのいかにも人懐っこそうな人々の姿や、ラマダーン月の刻限を知らせるために夜更けの街路を歩く太鼓の「ポコベン」という音 (p. 66)、週刊誌の結婚欄「オメデトウ！今週の新郎新婦」(p. 190) の「オメデトウ」があえてカタカナであるあたりなど、著者が読者の理解のために工夫した個所もエッセイとしての魅力を高めている。それはまるで、読者が抱く諸々の疑問についてイスラーム法学者がわかり易い言葉で、懇切かつ明快に答えているようである。本書は一般向けの図書として刊行されたが、研究者が読めば、先行研究を浮かべつつ、イスラーム的思考に関するさまざまな解釈の可能性が開示されていることに気づかされるのである。

「ジハードと過激派」および「あとがき」では現代社会に関して触れ、穏健派のイスラーム知識人の存在を紹介しつつ、「イスラーム世界は若さに満ちている。時には若気の至りとも思える事件も起きるが、それも活力の一部が出口を失って破綻しているというべきかもしれない」(pp. 234-235) と述べている。この「若気の至り」はエッセイでの表現であるが、筆者はムスリム過激派を理解する上で重要な示唆を与えていると考える。すなわち、過激派の問題は、果たしてムスリムだけの問題であろうか、という点である。筆者が最近感じるのは、人間社会では何年かに一度、若年層が感情にまかされた反体制的な動きを繰り返しているのではないか、ということである。それは政治思想を掲げたり、社会への反発で暴れたり、あるいは車での暴走など多種多様なものになっているが、社会の流れに逆らう精神が、実は若年の人間に共通するエネルギーであると考え、今後、急進派的な思考に関して、発達心理学、社会学、経済学などとともに、人類が抱える問題として、総合的な研究を行うことが求められるのではないかと考えるのである。こうした過激派の台頭について、「ビン・ラーディンは姿を消しても、イスラーム世界の各地に『アルカイダ』のブランドを用いる地方組織がいくつも生まれた」(p. 216) というくだりは示唆に富んでいる。すなわち、「アル＝カーイダ」が「ブランド化」するところに、現代社会を読み解くヒントがあるのではないだろうか。かつて、ソマリアの海賊がビン＝ラーディンに対しアル＝カーイダの一員として認めるように要請した際、ビン＝ラーディンは返答として、アル＝カーイダが海賊をアル＝カーイダ系と認めると、海賊そのものが米国の攻撃対象となるので、連携はしつつもアル＝カーイダ系であることを公表しない方がいいというやり取りが公開されたことがあった。すなわち、海賊にとって「アル＝カーイダ系」であることは自らの暴力や犯罪の宗教的正当化を可能とすることであり、そのことは同時に、「アル＝カーイダ系」であると判断すれば、米国側も堂々と攻撃できる理由を得ることになるという点で、テロ、対テロ双方の暴力の正当化の記号として「アル＝カーイダ(系)」が用いられているのである[山根 2015: 8-9]。その点で、著者のいう「ブランド」とは、「暴力の正当化を担うブランド」であると言えるのではないだろうか。

草の根的なイスラーム復興から過激派の内在するエネルギーまで、イスラームを解説するための発想のヒントに溢れた本書は、日本人の非ムスリムを対象として執筆された著作だが、本書がアラビア語や英語などに翻訳されて、非ムスリムのみならず、ムスリム自身に読まれればよいのではないかと感じた。ムスリムが自らの信仰の確信は抱きつつも、非ムスリムとの対話をどう説明するのがよいのかを考える機会を与える著作である、とさえ思わせるのである。そして、地域研究を志す若手研究者には、文献研究と現地体験の両輪によっていかに豊かな発想と知見が養われるかが伝わる著作であるといえよう。

<参考文献>

- 板垣雄三・後藤明(編) 1992 『事典 イスラームの都市性』 亜紀書房。
 小杉泰 1994 『イスラームとは何か——その宗教・社会・文化』 講談社現代新書。
 ——(編) 1996 『現代世界とイスラーム復興——イスラームに何がおきているか』 平凡社。
 —— 2015 『解説』 大塚和夫『イスラーム的——世界化時代の中で』 講談社学術文庫。
 ベシム S. ハキーム 1990 『イスラーム都市——アラブのまちづくりの原理』 (佐藤次高監訳) 第三書館。
 羽田正・三浦徹 1991 『イスラーム都市研究——歴史と展望』 東京大学出版会。

牧野信也 1979『アラブ的思考様式』講談社学術文庫。

三浦徹 1997『イスラームの都市世界』(世界史リブレット16)山川出版社。

山根聡 2015「序章 国家の輪郭と越境」山根聡・長縄宣博編著『越境者たちのユーラシア』ミネルヴァ書房。

(山根 聡 大阪大学大学院言語文化研究科教授)

ハサン・バンナー (北澤義之・高岡豊・横田貴之編訳)『ムスリム同胞団の思想——ハサン・バンナー論考集(上)』(イスラーム原典叢書) 岩波書店 2015年 294頁

ハサン・バンナー (北澤義之・高岡豊・横田貴之・福永浩一編訳)『ムスリム同胞団の思想——ハサン・バンナー論考集(下)』(イスラーム原典叢書) 岩波書店 2016年 376頁

この10年越しの労作の刊行を心より祝福したい。総勢9名の訳者たちによる共同作業には多くの苦勞もあったことと思う。世界最大のイスラーム主義組織・運動ムスリム同胞団。その創設者ハサン・バンナーの思想が綴られた書物を日本語で読めるようになったことは、誠に喜ばしい。本書が、日本におけるイスラーム主義・運動研究だけでなく、現代中東・イスラーム世界研究のこれからの発展に大きく寄与するものとなることを確信している。

1. バンナーのメッセージ

原著『ハサン・バンナー論考集』は、バンナーがムスリム同胞団内外の人びとに向けて発した数々のメッセージを編んだ書物であり、1934年から47年頃にかけて発表された数々の書簡、演説、機関誌に掲載された論考などから構成されている。そこには、バンナー自身のイスラームに対する理解、当時のエジプトを取り巻く状況や世界情勢についての見解、組織論、運動論など、多種多様なトピックが含まれている。そのため、同書は、バンナー思想を理解するための手がかりとして、今日に至るまで、同胞団のメンバーだけでなく、観察者からも重要視されてきた。

このことは、見方を変えれば、バンナーには自らの筆によって体系的に著された思想書がないことを意味する。バンナーが没後でもカリスマ的な人気を有してきた事実、さらには、ムスリム同胞団が世界最大のイスラーム主義組織・運動となった事実を鑑みれば、著作と呼べるものがないのは少々意外かもしれない。さらに、バンナーが発したメッセージの集積としての同書は、いくつかの点において、岩波書店の「イスラーム原典叢書」シリーズのなかでも異色な作品かもしれない。すなわち、体系的な著作ではないことに加えて、時代的にも新しいこと、そして、何よりも内容面において、メッセージ特有の簡潔さが目立ち、緻密で重厚な「古典」とは様相を異にしていることである。

そもそも、バンナー自身、伝統的なイスラーム教育を受けた正統派のウラマーではなく、師範学校出身のいわば新時代の知識人であり、伝統的な意味でのエリートではなかった。そのためだろうか、同書の内容には、オーソドックスなイスラーム学の観点から見れば、論拠(例えば、ハディースの典拠)が薄弱であったり、解釈の導出のための手続きが曖昧に見える箇所も散見される。バンナーと同時代に生きたウラマーたちにとっては、その思想らしからぬ思想は容易には受け入れるものではなかった。監訳者の1人横田貴之氏による「編訳者解説」(下巻巻末収録)では、エジプトの世俗主義政党のメンバーがバンナー思想の「単純さ」に言及したエピソードが紹介されているが(下巻577-578頁)、かつてシリアでムスリム同胞団の調査をした評者も同様の経験をしている。その際は、世俗主義者ではなくウラマーが、イスラーム教育を受けていないバンナーの思想を「いかがわしいもの」として批判していたのを覚えている。

2. 現代のイスラームにおける知の権威と正統性

だが、その「古典」や「伝統」からの逸脱こそが、バンナー思想の力の源泉であり、それゆえに、多くの人びとを惹きつけたことに注目しなくてはならない。バンナーの活躍した時代は、エジプトに大衆社会が形成されていった時代でもあった。それまでイスラームにおける伝統的な知の担い手であったウラマーやスー